キリストを知り、信頼するようになったあるユダヤ人の話

トム・カンター著
社長・創立者・CEO
Scantibodies Laboratory, Inc.
スカンティバディーズ　臨床検査室
Scantibodies Clinical Laboratory
スカンティバディーズ　ラボラトリー（株）

キリストを知り、信頼するようになったあるユダヤ人の話

トム・カンター著
社長・創立者・CEO
Scantibodies Laboratory, Inc.
スカンティバディーズ　臨床検査室
Scantibodies Clinical Laboratory
スカンティバディーズ　ラボラトリー(株)

主イエス・キリストを通して神の子となる事について、もっと知りたい方、祈って欲しい方は、著者トム・カンターにご連絡下さい。

tom.cantor@scantibodies.com
(619) 258-9300 or 1-800-279-9181

私の名前はトム・カンターと言います。スキャンティバディーズ・研究所の社長であり、創立者でもあります。これは、私のガレージで１３０ドルの資本金で始まりましたが、今日では約５００人が働く企業になっています。みなさんは、私がビジネスと科学に情熱を傾けているだろうと、思うかもしれません。しかし、私が自分の人生において情熱を傾けている対象は、一つしかありません。それは、主イエス・キリストです。では、一人のユダヤ人が—それも由緒あるラビ（ユダヤ教の教師）の孫であるユダヤ人が—どうして主イエス・キリストによって人生を変えられたのでしょうか？これからその事をお話ししたいと思います。

私は、ロスアンゼルスで典型的なユダヤ人家庭に生まれました。祖父は正統的なユダヤ教の礼拝の主唱者、またラビでしたが、私は世俗的なユダヤ人として育ちました。育った場所の関係で、私の友人はみな、ユダヤ人でした。母と父は結婚生活がうまく行かず、私が1歳の時に離婚しました。父は5回結婚と離婚をくり返し、母は3回繰り返しました。私は若い頃、まじめにシナゴーグ(ユダヤ教の会堂)とヘブル人の学校に行っていました。その頃、ふと、神は本当にいるのだろうか、と思った事があります。ですが、神は私の思考の中には存在しませんでしたし、また確かに、神に私の人生を支配してもらいたくなかったのです。私にとってユダヤ教は、基本的に文化に過ぎませんでした。

毎年、家庭や友人の家で過越の祭りを祝い、その度に、どのようにしてエジプト人がユダヤ人を根絶やしにしようとしたか、そしてどのようにして神がモーセを遣わしてエジプトからユダヤ人を救い出したかが、くり返し語られました。私には、過越の祭りは「異邦人は私たちを殺そうとしたが、神は私たちを救われた。さあ、食べよう。」と言っている、典型的なユダヤ人の祭日のように思われました。毎年、新年（ロシュ・ハシャナー）と贖いの日（ヨム・キップル）に宮に行きました。宮では、ヨム・キップルの日には、前の年のすべての罪、私たちが犯したすべての過ちが贖われる—過去の記録はきれいにぬぐい去られる、と語られました。私は、「もし、毎年そんなに簡単にぬぐい去られるのなら、罪とはいったいどの程度悪いものなのだろう？」と思ったものでした。

シナゴーグの礼拝室に座っている時、周りを見渡しながら、「毎年罪を犯し続けるなんて、ここにいる人たちはみんな、どこが悪いのだろう？」とも思いました。もし、彼らが自分の罪を全部認めるほどに正直なら、どうして前の年の罪を一つ残らず全部思い出したと確信できるのだろう？彼らは本当にまじめに信じているのだろうか？私は、自分がどうして毎年ここに戻ってこなければならないのかを疑問に思った事はありませんでした。なぜなら私は不良少年であり、いつも問題を起こしてばかりいたからです。礼拝の中で、すべての罪を思い出す時になると、どこから始めていいのかわかりませんでしたし、それだけでなく、本気で人生を変えようなどとはこれっぽっちも思っていなかったのです。

私が手に負えない子どもだという事は、まわりに知れ渡っていました。7歳の時、西ロスアンゼルスにあるアーバン・ミリタリー・アカデミー［訳註：都市部にある軍隊学校］に送られました。キチッと折り目の付いた軍服に身を包みながらも、私はなお多くの問題を起こしてやろうとしました。たとえば火災報知器を鳴らして、学校全体を授業停止にさせたりとかです。８歳の時、不名誉な事に退学処分を受けました。１５歳までには、私は居場所がなくなっていました。というのは、継父とも継母ともうまくやっていく事ができなかったからです。私は著名なＵＣＬＡ（カリフォルニア大学ロサンゼルス校）の心理学の教授の所に送られ、私のどこが悪いか、診てもらいました。彼の評価は、私は本当はよい子だというものでした。

私は彼が間違っていると知っていて、もし私がその気なら彼の心を変える事ができると確信していました。彼はさらに、私の良い性質を腐敗させたのはロスアンゼルスの環境であると結論づけました。それで、教授と両親の話し合いの結果、私はスイスにある寄宿制の学校に送られる事になりました。
ある夕方、ニューヨークのケネディ空港へ向かう夜行便に乗り、翌朝、着いてからクィーン・メアリー号という船のところに行き、トランクをポーターに預けました。中には、私のお気に入りのレコードアルバムがいっぱい入っていました。新しく得た自由に心を躍らせながら、私はその大きな町にいそいそと出て行き、午前中いっぱい、一人であちこちと見て回りました。午後、クィーン・メアリー号に乗り込みました。

船が港から離れ、乗客たちはみな、デッキの後ろに集まって、見送りに来た人々に別れを惜しんで白いハンカチを振っていました。その時、私が海外に行くのは初めてというのに、さよならを言いに来てくれている人が一人もいない事に気付いて、それまで感じた事のない恐れが私の心を覆いました。けれどもまもなく、同じ学校に行く人が4人、同じ船に乗っている事が分かり、しかもそれはみな女の子でしたから、事態は良い方に向き始め、寂しさも消えました。
学校に行き始めてまもなく、酒やケンカで問題を起こすようになりました。学校が始まって7週間ほどで退学になりました。そういう形では家に帰りたくなかったので、ロスアンゼルスに送り返される前日、私は石段で転んで腎臓を痛めたふりをしました。

スイスのモントルーの病院に運ばれました。採尿のために一人になった時、私は自分の指の先を切って、その血を一、二滴、尿に混ぜました。この計画には一つ問題があったことが、数日後に判明しました。医師が私の部屋に来て、手術をしなければならないかもしれないと告げたのです。突然、私は回復して、それからは尿に血が見られなくなりました。
私が病院にいる間に、父はローザンヌにある寄宿学校を見つける事ができました。2年後に卒業するまで、私はどうにかこうにかそこに留まりました。ヨーロッパにいた間に、私は多くの罪を犯し、自分の内側の汚さをいやと言うほど思い知らされました。この汚れの感覚はとても強く、ある夜、私は寄宿舎で2時間もの間、シャワーを浴び続けました。

けれども、当然の事ながら、シャワーを浴びる前と後で、汚れの感じは何も変わりませんでした。
１７歳の時、オハイオ州オックスフォードにあるマイアミ大学に入学しました。その頃、私の内側をかき乱してやまない、どうしてもぬぐい去れない汚れの感覚を持ったままでは、これ以上生きていけないと感じて、自殺を考えたりもしました。そして、ガールフレンドができたらもしかしたら、心が安らぐかもしれないと思いました。
大学の図書館の地下には、音楽視聴用の小さな部屋がありました。そのドアには窓がついていたので、私はウインドーショッピングをしようと思いました。私はかわいい女の子を見つけ（彼女が１９７０年以来、私の妻です。）、

ドアをノックして、自分も同じ音楽を聴きたいのだが、他にあいてる部屋がないのでいっしょに聴かせてもらえないか、と声をかけました。すぐに彼女がアフリカの民族音楽を聴いていた事がわかりました。どうしてアフリカの民族音楽が好きなのかを説明しなければならない羽目になりました。彼女の名前はシェリルと言い、オハイオ州のアクロンから来ていました。話をし始めて、私がユダヤ人だと告げると、彼女は、自分はユダヤ人を愛する異邦人だと言いました。けげんに思って、どうしてユダヤ人を愛するのかときくと、彼女は、聖書はすべてユダヤ人によって書かれたし、自分の救い主もユダヤ人だからと説明しました。その後、何ヶ月か経つにつれて、私たちのつきあいはより真剣なものになっていきました。

家に帰った時、私は一人の女性と出会ったと父に告げました。父は三つの単語からなる典型的な質問をしました。「彼女はユダヤ人か？」違うと告げると、父はラスベガスまで5時間のドライブを計画してくれました。父と、父の友人のニューマンという人といっしょでした。車の中で彼らは私に、ナチスはみな、クリスチャンであった事、そしてどうしてユダヤ人はクリスチャンと関係を持つことができないのか、力を込めて講義しました。しかし私は内心思いました。「シェリルはナチスのようには見えないよ。」
学校に戻ると、私より3歳年上のシェリルはもうすぐ卒業でした。このまま手放してしまったら彼女を失うかもしれないという恐れと、父が私たちの関係を壊そうとしているのを知っていたので、私は衝動的に、

すぐに結婚しよう、とプロポーズしました。シェリルは２１歳で私はまだ１９歳でした。オハイオ州では、両方の両親の署名なしに二人だけの合意で結婚できるのは２１歳以上だったので、オハイオ州では私たちは結婚できませんでした。しかしオハイオ川から少し車で行ったケンタッキー州に行けば、その問題は解決しました。ケンタッキー州ではそのような年齢制限がないからです。私たちは１００ドルしかありませんでしたが、結婚しました。
結婚してから、母に電話をして結婚したと伝えました。すると母は、結婚生活はどう？ときいたので、私は「すばらしいよ！もっと早く結婚してれば良かった！」と答えました。その時、母は、私がまだ１９歳だと指摘しました

父のほうは、激しく怒りました。フロリダのマイアミで外科医をしている叔父から電話がありました。彼は、私の家族に代わって電話をしている事、そして彼は穏やかに、怒らずに話そうと言い、ある提案をしました。私がある部屋に入ると、テーブルに大金が置いてあるから、その金を取ってすぐに離婚し、異邦人と結婚した事など忘れるのだ、というものでした。それが、彼の言う選択肢Aでした。選択肢Bは、「せいぜい幸せに暮らせよ」すなわち、家族からサヨナラをするというものでした。私は選択肢Bを取りました。私の夢である少女と結婚したら、あのしつこくまとわりつく汚れと罪の感覚が消えると思っていました。しかし、とても残念な事に、そこにも平安はありませんでした。

失望して、自暴自棄になり、こうなったら神が存在するのかどうか、神が自分を助ける事ができるのかどうか、試してやろうと決心しました。新旧約聖書を買い揃え、妻には、夜遅くまで働かなければならないと言いました。仕事の後、毎日２時間、聖書を読み、死に物狂いで神を見出そうとしました。どう祈っていいのかもわからなかったので、ただ「おお、神よ。（もし神がいるなら）私を助けて下さい。」とだけ言いました。ヘブル人の学校で旧約聖書はいくらか読んでいたので、新約聖書から読み始める事にしました。読みはしましたが、聖書を自分に適用する事ができませんでした。主イエス・キリストという方がどんなに良い人間かという事は読めました。しかししばらくして、主イエス・キリストの語ったある箇所に来たのです。それはマタイ１５：１９－２０でした。

「悪い考え、殺人、姦淫、不品行、盗み、偽証、ののしりは心から出て来るからです。これらは、人を汚すものです。」(マタイ15:19-20)
この言葉が私の注意を引きました。神を試し、神を見出そうと私を突き動かしていた原因ともなっていた、私の必要について、あたかもキリストが私に直接向かって、きわめて正確に説明してくれたようでした。なぜ私が汚れたと感じるのか、その本当の理由について、かつて誰も私に告げる事のできなかった事を語ってくれたのです。それはとても単純な事でした。主イエス・キリストの説明は、私が汚れていると感じるのは、事実私が汚れているからであり、私が汚れているのは、他でもない私自身の心から出てくる邪悪な考えのせいである、というものでした。

キリストの言葉は、本当に私の事を知っている方としての権威を持って、私の心に入ってきました。そのような権威ある説明によって、私はさらに、聖書のうちに汚れからの解放を見出す事ができるかもしれない、という希望で心が沸き立ちました。しかし、読み進めていき、主イエス・キリストがどのような死に方をしたかを読んだ時、私はショックを受けました。なぜキリストが裏切られ、蔑まれ、そして十字架の上でむごい死に方をしなければならなかったのか、私には理解できませんでした。その死について思い巡らしていた時、私のユダヤ人の叔父であるピートが2年前に言った事を思い出しました。シェリルと私は、過越の祭りの食事を共にするために、シンシナティにある彼の家に行きました。

彼は、神がどのようにユダヤ人を救ったかが書いてあるハガダーという書を読み終えて、食事を始めようとしていました。叔母のメアリーは、その家庭では中心的な存在でしたが、その時は台所にいました。叔父のピートは、時たま奥さんの気に障る事を言って喜んでいるようでした。そこで、叔母のメアリーが台所でチキンスープを作っている時に、ピート叔父さんはこう言ったのです。「クリスチャンは、キリストが過越の子羊だと信じている。」と。すぐにメアリー叔母さんが「ピート、お黙りなさい！」と台所から叫びました。しかし、ピート叔父さんの言った事は、私の頭に残っていました。「キリストが過越の子羊である。」とはどういう意味なのだろう、と思いました。

私は旧約聖書の出エジプト記の１２章に戻って、もう一度過越の祭りについて読んでみる事にしました。驚いた事に、私はこれまで何年も過越の食事に出席していながら、出エジプト記１２章に書いてある過越の本当の意味についてまったく知らなかったのです。過越の本当の意味は、子羊にありました。そこには、ある夜、全家庭のすべての男子の初子が死ぬ、その家庭がユダヤ人であるかエジプト人であるかに関係ない、と神が語ったと書いていました。しかし、その死を逃れる方法が一つだけありました。もし、子羊を屠ってその血を門のかもいと二本の門柱（かもいと門柱で十字架の形になっている）につけるなら、その家は死を免れるのです。

その家が免れる理由は、神がその血を見て、その家を通り過ぎて（またはその家を飛ばして）その中にいる男子の初子を殺さない、と語られたからでした。
「あなたがたのいる家々の血は、あなたがたのためにしるしとなる。わたしはその血を見て、あなたがたの所を通り越そう。わたしがエジプトの地を打つとき、あなたがたには滅びのわざわいは起こらない。」（出エジプト記12:13）
私は、もし子羊がなければ、そして子羊の血がかもいに塗られなければ、憐れみはどこにもなく、死をもたらす裁きから免れる家は一つもなかったという事が、はっきりとわかりました。それから私は新約聖書でバプテスマのヨハネが、主イエス・キリストを何と呼んでいるかを読みました。ヨハネの福音書１：２９にこう書いています。

「ヨハネは自分のほうにイエスが来られるのを見て言った。『見よ、世の罪を取り除く神の小羊。』」(ヨハネ1:20)
その瞬間、私はキリストの死が自分を救ってくれるかもしれないという希望を得ました。私は、自分の汚れは、自分が罪人であり、死に値する者である事のあらわれだと理解しましたが、同時に、おそらく主イエス・キリストが私の過越の子羊となってくれて、私の罪を取り去ってくれるだろうという事も理解しました。もし主イエス・キリストが私の過越の子羊になってくれたのなら、私はクリスチャンではないだろうか、と思いました。その事は私にとってジレンマとなりました。なぜなら、私はずっと、異邦人というのはクリスチャンかイスラム教徒であって、ユダヤ人はクリスチャンではあり得ないと教えられてきたからです。

そのように育てられてきたために、私は真のクリスチャンとは何なのかを理解する必要がありました。
職場で、私は異邦人の同僚３人といっしょにお昼を食べました。この男たちは既婚者でしたが、みな愛人を持っており、その事をお昼の間中、しゃべっていました。私は、この異邦人たちも本当にクリスチャンなのだろうか？と思いました。それで、その事を確かめるためにある実験をしてみる事にしました。ある日、実験のチャンスが来ました。彼らが姦淫について話し始めた時、私は彼らに言いました。「あんたたちはイエス・キリストが必要だね。」私はまだ主イエス・キリストを信じていなかったのですが、彼らの反応を見るために実験としてこのように言ったのです。

すぐに、私は彼らの仲間から排除されました。その反応から、すべての異邦人が真のクリスチャンであるわけではないという事がわかりました。
それから、妻と私はサン・ディエゴに移りました。そこで私は妻に、自分が「宗教的な」人間になろうとしていると言いました。自分はユダヤ人であり、教会に行った事がなかったので、ユダヤ人のシナゴーグ（会堂）に戻らなければいけないと言いました。私は新聞で調べて、サン・ディエゴにある改革派ユダヤ教の宮を見つけました。そこのラビ（律法の教師）に電話をかけ、モーセが出エジプト記で書いた事を読んできたと言いました。

モーセの事を話すと、そのラビは私を遮って、自分は文字通りモーセという名前の人物がいたとは信じておらず、ただモーセの書は、モーセというペンネームを使った一連の何人かの人々によって書かれたものだ信じていると言いました。
私はビックリして、自分はどうも間違え電話をかけたようだ、お煩わせしてすいません、と言いました。
それから私は正統的なユダヤ教の会堂に行き、ラビと話す事にしました。また新聞で調べて、サンディエゴにある正統的なユダヤ教の宮を見つけ、金曜日の夜の礼拝に行きました。ラビのメッセージの間、私は注意深く聞きました。（他の多くの人たちは互いに世間話をしたりしていましたが。

）礼拝の後、私はラビに、自分はイエスがメシア（救い主）であると信じていると言いました。ラビは、もし私がもう一度、イエスという名を口にしたら、この会堂に入る事を禁じるとハッキリと答えました。この事は私を混乱させ、一体自分はどこへ行ったらいいのか、わからなくなりました。

新聞で、バプテスト教会がイスラエルについての映画をやるという広告を見たので、見に行く事にしました。映画が終わってから、誰かが私にユダヤ人なのかときいてきて、私をそこの牧師に紹介してくれました。その牧師は私に、自分の祖母はユダヤ人だと告げたので、今度会う約束をしました。私はその牧師に、自分はイエスがメシアであると信じていると告げました。

牧師は私に、主イエス・キリストを自分の主、また救い主として受け入れた事があるかと尋ねました。私は何の事を言っているのかわからないと答えると、彼は次のように説明してくれました。それは、あたかも彼が私に本を与えようとして差し出して、そのままずっと私に向かって差し出したままでいるようなものである。私は、彼が私に本をくれようと差し出していると信じると言う事ができるだろうし、またそのように差し出してくれた事に感謝する事もできるだろう。しかし、たとえその本が私にくれるために差し出されていると信じていても、その本が彼の手の中にある限りは、実際には私はその本を受け取った事にはならない。

その本を受け取るには、彼が私に本を差し出していると信じた事に基づいて行動し、手を伸ばして、その本を自分の手に取らなければならない。彼はそのように、信じる事と受け入れる事の違いを説明してくれました。信じる事と受け入れる事との違いを理解するために、彼は聖書から、この事が書かれているヨハネの福音書１：１２を示してくれました。「しかし、この方を受け入れた人々、すなわち、その名を信じた人々には、神の子どもとされる特権をお与えになった。」(ヨハネ1:12)

私は牧師に、どうしたら主イエス・キリストを受け入れる事ができるのかときました。彼は、ただ私が心から、次のようにシンプルに祈ればよいと答えました。「主イエス様、私は罪人です。

どうか、私の罪をお赦し下さい。私の心に来て下さって、私の主、救い主となって下さい。」私は彼のあとについてその祈りを祈りました。すると、それまで何年もの間、私から離れず私を衰弱させてきた汚れの感覚が、ただちに消え去りました。以来、それは二度と戻って来ませんでした。その時から、神の言葉—聖書—の権威に基づき、私のために完全な犠牲となってくれた主イエス・キリストに信頼する事によって、自分が神の子どもであり、完全に赦されている事、また神が今や私の友である事の確信を得ました。聖書が述べている事を読み、信じた時に、死の恐れはいっさい消え失せました。

すなわち、主イエス・キリストに信頼する神の子どもにとって、死は眠りにつくようなものであって、自分を愛して自分のために死んでくれた方の御臨在の中に目を覚ます事なのです。私はすぐに主イエス・キリストは、ご自分が語られた通りの方であることを認め、信じました。すなわち神、まさしく神であって、ヘブル語でエロヒームという複数形で呼ばれている通り、神は三つの区別される人格から成っているのです。[訳注：「三位一体」なる神の事。])聖書が主イエス・キリストについて、人類の唯一の造り主であり裁き主であると明らかにしている通りにそのまま見て、信じた時に、大きな慰めと確信が訪れました。

希望のない人生だったのが、その日、すばらしい希望に満ちた人生に変わり、それ以来ずっとそうなのです。私が主イエス・キリストを自分の救い主として受け入れて、神が私を赦してくれた時、聖書で神が意図しておられた事がわかりました。

「あなたは私のすべての罪を、あなたのうしろに投げやられました。」(イザヤ書38:17)

神と私との間に立ちはだかるものが何もないと言っている箇所です。

「わたしは彼らの咎を赦し、彼らの罪を二度と思い出さないからだ。」(エレミヤ書31:34)

私たちの罪を神は覚えてもいないと言っている箇所です。

「東が西から遠く離れているように、私たちのそむきの罪を私たちから遠く離される。」(詩篇103:12)
私たちの罪は神の近くにはまったく残されていないと言っている箇所です。
「すべての罪を海の深みに投げ入れてください。」(ミカ7:19)
私たちの罪が再び姿を現わす事が決してないと言っている箇所です。
私は心の中に、同胞ユダヤ人に対する特別な思いを持っています。なぜなら天国と地獄は現実の場所だからです。すべての人にとって、二つの可能性しかありません。一つは、何も治療を受けずに罪の中で死ぬ事であり、それは地獄、すなわち永遠の裁きに確実に至る道です。他の可能性は、神の全くの賜物である救いを受け取る事です。

他の可能性は、神の全くの賜物である救いを受け取る事です。その救いは、主イエス・キリストご自身の十字架上の犠牲によるもので、すべての罪のための完全な代価として捧げられたものです。そして完全に受け入れられている神の子どもとして完全に赦され、天に迎えられるのです。しかしあなたは、ユダヤ人はイエスを信じない、と言うかもしれません。「この小冊子は何のために書かれたのだろう？」あなたは不思議に思うかもしれません。「どうして彼は、自分と同じように私が神のもとに来るのを見たがっているのだろう？」これに答えるため、私のイスラエル人の友人の父の話をさせて下さい。

私には、エルサレムにアビとタミという名前の友人がいます。タミの父親の名前はシモン・ワッサーマンと言いました。彼は

、１９１０年、ドイツのベルリンに住むユダヤ人家庭に生まれました。シモンの父はショケット、つまりユダヤ人の肉屋でした。私の祖父もバージニアのペテルスブルグで同じ仕事をしていました。シモンは、一人の兄弟と二人の姉妹がいて、家族は楽しく幸せな日々をベルリンで過ごしていました。何と言っても、当時のベルリンは芸術、音楽、娯楽、文学、ビジネス、それに科学における世界的な中心地の一つでした。堂々たる建物が建ち並び、公園、川、湖、それに「ウンターデンリンデン通り」のような並木道が整えられた美しい町でした。シモンの父は、ベルリンで繁栄していたユダヤ人共同体でも一目置かれるような地位についていて、ワッサーマン家は、とても快適に暮らしていました。シモンは長身で金髪、青い目をしていて、ユダヤ人に

は見えませんでした。シモンは大きくなるにつれて、ユダヤ人の友人だけでなく、ドイツ人の友人も持つようになりました。１９３０年、シモンが２０歳の時、シオニスト（訳註：パレスチナにおけるユダヤ人国家の建設を目標として掲げる人々）・ユダヤ人と結婚していたシモンの姉が、家族を驚かせました。自分たちはパレスチナに引っ越すと言ったのです。当時、ベルリンというとても文化的な町から、未開で危険なパレスチナ地域に引っ越すなどとは、突拍子もない話で、そんな事を言い出すのはよほどの変人だけでした。その頃、シモンはアドルフ・ヒットラーという新しく台頭してきた政治家に注意し始めていました。シモンはヒットラーの書いた『我が闘争』を読み、ヒットラーの反ユダヤの意図に気付いていました。

シモンは、アドルフ・ヒットラーがユダヤ人にとって非常に危険である事を確信するようになりました。よくよく考えた末、シモンもドイツを去って、姉夫婦といっしょにパレスチナへ行く事にしました。それで１９３２年、シモンはパレスチナへの移民許可をイギリス政府に申請しました。イギリス政府はシモンに、パレスチナにはもう十分な数のユダヤ人がいる事、そしてその地への移民許可はユダヤ人に対しては、もはや与えられない事を通告してきました。しかしながら、パレスチナには新しいエレベーターの技術があり、エレベーター技術者が不足していました。つまり、エレベーター技術者であれば、ユダヤ人でもパレスチナへの移民許可がおりるという事です。

それで１９３２年、シモン・ワッサーマンは、ベルリンにあるエレベーター技術者養成の１年コースに入学しました。１９３３年、ついにエレベーター技術者証を手にして、シモン・ワッサーマンはパレスチナへの移民許可をイギリス政府から与えられました。（１９３３年は、ヒットラーが首相になってドイツに対して権力を持った年でもありました。）パレスチナでの生活は、シモンにとって生きがいのあるものでした。というのは、ユダヤ人たちは故国を創立するというビジョンに燃えていたからです。他方、タミの母親は美しい人で、やはりパレスチナに移民しようとしてラトビアから来ました。

しかし国境で、イギリスは彼女から大金を取り、3ヶ月以内にパレスチナから出ていくように、さもないとそのお金は没収され、不法入国者として追われる事になると告げました。居住する望みが消え失せた時、タミの母親は、彼女が居住できるために、便宜的に彼女と結婚する事に同意した年配のイエメン系ユダヤ人を見つけました。ある日、テルアビブの浜辺で、シモンはタミの母に出会い、二人は恋に落ちました。二人は年配のイエメン系ユダヤ人の所に行き、離婚してくれるよう頼みました。しかし、その年配のイエメン系ユダヤ人は、自分が彼女に恋してしまったと言って拒否しました。やっとの事で、彼らは離婚をしてくれるように彼を説得し、タミの父親と母親は結婚しました。

若くて幸せいっぱいの二人は、いっしょに力を合わせて故国ユダヤで自分たちの生活を築きました。しかし彼らは、すべてのユダヤ人と同様、反ユダヤ主義の暗雲を注意深く監視していました。ヒットラーのユダヤ人絶滅の目標は留まることなく進んでいました。
１９３８年の１１月は、おぞましい「水晶の夜（クリスタルナハト）」でした。ドイツ中でユダヤ人の店の窓ガラスは壊され、ユダヤ人の家やアパートメントは破壊され、シナゴーグは打ち壊されて火をつけられたのです。多くのユダヤ人が捕らえられ、ある者は打たれ、またある者は殺されさえしました。１９３９年までには、ドイツのユダヤ人が真夜中に家から連れ去られて、

その後二度と姿を見る事がなかったという事実が、世界中に知れ渡りました。おぞましいキャンプで、恐ろしいユダヤ人の大量虐殺を目撃した人の報告もありました。同じ年の１９３９年、シモン・ワッサーマンはベルリンから一通の手紙を受け取りました。封を切って、驚きました。それはドイツ人である、彼のかつての友人からの手紙でした。その手紙には次のように書かれていました。

親愛なるシモンへ

　私はゲシュタポとナチス親衛隊のとても高い地位に着き、今、処刑されるユダヤ人のリストを見ています。あなたの母親、父親、姉妹、兄弟がそのリストにあります。シモン、あなたは私の親友で

すから、私はあなたとあなたの家族のためにあえて危険を冒すつもりです。この手紙の２ページ目は、２週間の通行証です。この通行証を持っていれば、あなたはドイツに、ベルリンに、そしてあなたの家に戻る事ができます。この通行証を持っていれば、あなたはあなたの父親、母親、姉、弟を連れてドイツを出る事が許可され、彼らを救う事ができます。

シモンはその手紙を妻と友人たちに見せました。彼らは、ドイツに戻る事を考えるなんて正気ではないと言いました。それは罠だ、ドイツに戻ったら通行証を取り上げられるのだ、そしたらどうなると思う？死のキャンプに向かう行列に一人加えられるだけだ、と彼らはシモンをさとそうとしました。

彼らはシモンに、ヒットラーのゲシュタポやナチス親衛隊に魂を売った人間の事など信じる事はできない、彼らこそ、ユダヤ人を抹殺している者どもなのだから、と言いました。彼らはシモンに、「ライオンの口」の中に入っていかないようにと懇願しました。シモンは葛藤しましたが、家族の絶望的な状況によって、彼の心は強く捕らえられていました。シモンは、どんな犠牲を払おうとも、他に選択の余地はないと決心しました。シモンは、もし今、家族を救いに行かなかったら、自分はこの先、生きていく事ができないだろうと結論しました。彼は、家族を救おうとして死ぬとしたら、自分もベルリンにいる家族と同じ死に方をする事になるだろうと思いました。

しかしそれでも、彼は、家族を救いに行かなければならないという事だけは知っていました。
シモンはパレスチナを出発してドイツに向かいました。ドイツに入って、彼はショックを受けました。同胞のユダヤ人たちが、つまらない動物のように扱われていたのです。通行証のおかげで、シモンは何事もなく家族の家に帰る事が許されました。
家に着くと、彼は家族に例の手紙を見せて、自分が来た理由を説明しました。彼の家族は彼に何と言ったと思いますか？彼らはこう言ったのです。「シモン、私たちはドイツ人だ！パレスチナ？シモン、気でも違ったか？パレスチナは危険だ。パレスチナにはアラブ人がいるし、弾丸も飛び交っている。それに汚い。

ベルリンがどんなに美しいか見てみなさい！おまえは私たちに、この美しい町を捨てて、砂だらけの、ほこりっぽい、汚いパレスチナに行かせたいのか？おまえは、ここにあるすべてのものを捨てさせたいのか？その手紙は罠さ。その友人とやらは、ただ私たちに財産を捨てさせたいだけの、こそ泥に過ぎない。財産をすべて捨てるなんて、払う代価が大きすぎて考えただけでもぞっとするよ。そんなバカな事は言わないでくれ、シモン。私たちはドイツ人だ。」シモンは再度、その手紙を見せましたが、彼らは、それは自分たちの家や財産を没収するための罠に過ぎないと繰り返すだけでした。シモンは、強制収容所や大量虐殺の事を話しましたが、彼らは「噂だよ、シモン。

おまえはその目でそのキャンプを見たのか？その大量虐殺を見たのか？私たちはドイツの事を話をしているんだ。世界で最も高度な文明を誇るドイツの！そんなバカな話ややめてくれ。」シモンはアドルフ・ヒットラーの事をよく考えてくれと懇願しましたが、彼らは「ヒットラー？やつは頭のいかれた男さ。あいつは誰かに暗殺されるだろう。でなければ、今の職から放り出されるか、選挙で退けられるさ。やつの事は、一時的な問題に過ぎん。」と答えました。シモンは家族に２週間もの間、懇願し続けましたが、結局、一人でドイツを離れなければなりませんでした。彼の家族はみな、殺されました。

私の友であるみなさん、私がどうしてこの事をみなさんに書いているか、おわかりですか？それは、地獄の危険の現実について、みなさんに懇願しているという意味で、私がシモン・ワッサーマンだからです。神の犠牲（主イエス・キリスト）に信頼する事なしには、あなたはまだ罪の中にあり、そうならば、あなたは確実に大虐殺が待っている地獄に下る道のまっただ中にいるのだと聖書は語っています。シモン・ワッサーマンが彼の家族に救われるようにと懇願したように、私はみなさんに、イエス・キリストによって、確実に来る滅びから逃れて、救われるようにと懇願します。救われるために、みなさんがしなければならない事は、主イエス・キリストの所に来ることです。

キリストはあなたを愛し、あなたを救うために御手を広げてあなたの方にさしのべています。神は、あなたが滅びるのを望んでおられません。
「主は、ある人たちがおそいと思っているように、その約束のことを遅らせておられるのではありません。かえって、あなたがたに対して忍耐深くあられるのであって、ひとりでも滅びることを望まず、すべての人が悔い改めに進むことを望んでおられるのです。」(第二ペテロ3:9)
主イエス・キリストを受け入れるか、拒むかによって、得るものと失うものとが天と地ほども違ってきます。あなたの永遠の状態がかかっているのです。今、この瞬間にも、私の友であるみなさんは、主イエス・キリストから、ご自身のもとに来るようにと招かれています。

キリストの招きに応えて下さい。
「すべて、疲れた人、重荷を負っている人は、わたしのところに来なさい。わたしがあなたがたを休ませてあげます。」(マタイ11:28)
あなたは、自分の罪から救われるようにとキリストに招かれています。主イエス・キリストご自身があなたの造り主であり、キリストは、あなたが受けなければならない裁きからの避け所を求めて、今、キリストのもとに逃れるのでなければ、あなたが地獄から逃れる望みはない、という事をご存じなのです。
「すべてのものは、この方によって造られた。造られたもので、この方によらずにできたものは一つもない。」(ヨハネ1:3)

「神は、すべての人が救われて、真理を知るようになるのを望んでおられます。神は唯一です。また、神と人との間の仲介者も唯一であって、それは人としてのキリスト・イエスです。キリストは、すべての人の贖いの代価として、ご自身をお与えになりました。」(第一テモテ2:4-6)
「この方以外には、だれによっても救いはありません。天の下でこの御名のほかに、私たちが救われるべき名は人に与えられていないからです。」(使徒の働き4:12)
「イエスは彼に言われた。『わたしが道であり、真理であり、いのちなのです。わたしを通してでなければ、だれひとり父のみもとに来ることはありません。』」(ヨハネ14:6)

私の友人たちよ、今、神があなたを招いておられると考えてみて下さい。この招きを神からの電話として考えて下さい。神が電話をかけています。あなたはその電話に出ますか？神があなたに求めているのは、ただ、神に敵対する心やプライドなどの武具を投げ捨てて、十字架上に表わされた神の愛に降伏することです。その十字架の上で、キリストはあなたの罪のために死なれたのです。「しかし、神は、さらに豊かな恵みを与えてくださいます。ですから、こう言われています。「神は、高ぶる者を退け、へりくだる者に恵みをお授けになる。」（ヤコブ4:6）

「『きょう、もし御声を聞くならば、御怒りを引き起こしたときのように、心をかたくなにしてはならない。』と言われているからです。」(ヘブル3:15)
「しかし私たちがまだ罪人であったとき、キリストが私たちのために死んでくださったことにより、神は私たちに対するご自身の愛を明らかにしておられます。」(ローマ5:8)
「キリストは、聖書の示すとおりに、私たちの罪のために死なれた。」(第一コリント15:3)
へりくだって、心を開いて、自分が罪人である事を神に向かって同意し、神に赦しを乞い、主イエス・キリストを自分の主また救い主として受け入れたい、と神に告げて下さい。

救われたいと神に呼び求める者は誰でも、すべての人を救うと神は約束されました。あなたが自分の罪から救ってもらうために、主イエス・キリストの御名を呼び求めるなら、それだけで神はあなたを救って下さるという神の約束を信じて、それに基づいて行動して下さい。

「すべての人は、罪を犯したので、神からの栄誉を受けることがでない。」(ローマ3:23)

「罪から来る報酬は死です。しかし、神の下さる賜物は、私たちの主キリスト・イエスにある永遠のいのちです。」(ローマ6:23)

「『主の御名を呼び求める者は、だれでも救われる』のです。」(ローマ10:13)

「わたし[イエス]のところに来る者を、わたしは決して捨てません。」(ヨハネ6:37)

11--07 vs 01